

「 Bangladesh Fashion Field Study:」  
映像制作を手法としたフィールド教育の可能性

南 出 和 余

**Bangladesh Fashion Field Study:  
The Potential of Filmmaking in Education**

**MINAMIDE Kazuyo**

## **Abstract**

This paper discusses a field study course conducted in Bangladesh as an example of how we can introduce fieldwork to our students and suggests filmmaking as a method of study. The Bangladesh Fashion Field Study (BFFS), which I conducted with my co-instructor in February 2020, examined Bangladesh fashion from two aspects: the export-oriented garment industry and the transformation of the local fashion culture. Problems in Bangladesh's garment industry are widely recognized as a global issue. Therefore in order to prevent the field study from becoming a "confirmation tour" of preconceptions, especially of "developing countries," I encouraged students to investigate local fashion and to think about how global and local industries and cultures are negotiated. This was done through making a film, as the processes of filming and editing could allow students to carefully interpret the video footage they shot in the field.

Bangladesh is a field where various poverty reduction and social development projects have been carried out since independence in 1971, and where many international NGOs and universities have developed field education programs in collaboration with local NGOs. Although Bangladesh society has been an arena of development studies, it is currently undergoing major changes, including in the nature of its international relations with other countries. Through the BFFS, I invite students to Bangladesh to discover what can be considered collective "global issues."

**Keywords:** Field Study, Bangladesh, Fashion, Filmmaking, Global Issue

## 要 旨

本稿は、バングラデシュでのフィールド教育実践について、対象とテーマの設定、また映像制作を方法とすることの可能性について検討する。2020年2月に筆者が共同担当者とともに実施した「バングラデシュ・ファッション・フィールド・スタディ (BFFS)」では、バングラデシュのファッションをめぐる2つの動きに着目した。1つは輸出型アパレル産業、もう1つはバングラデシュ国内のローカルファッション文化とその変容である。前者はグローバル・イシューとして広く知られているが、学生たちにとって「先入観確認ツアー」とならないために、後者のローカルファッションに関する調査を促し、グローバルとローカルの住み分けられた状況について考える機会とした。また、記録と成果発表の手法として映像制作を導入した。撮影や編集のプロセスは学生たちに、見たもの、聞いたことに忠実に解釈を構築させうる。

バングラデシュではこれまでも国際協力 NGO や大学が現地 NGO とのコラボによって、社会開発をテーマとした海外体験学習を展開してきた。しかし現在バングラデシュは大きな社会変動を迎えており、国際関係のあり方も変化しつつある。本稿で筆者が検討したフィールド教育は、「私たちの問題＝グローバル・イシュー」にバングラデシュで出会うことを促す機会であった。

**キーワード：**フィールド教育、バングラデシュ、ファッション、映像制作、グローバル・イシュー

## 1. はじめに

近年、フィールド教育がさまざまなかたちで大学教育に取り入れられている。学内の講義では賄えない、社会調査法（質的調査）の習得、課題解決型学習＝PBL（Project Based Learning）、アクティヴ・ラーニング、サービス・ラーニングといった試みのなかで、その教育的意義が、主に学習者の積極的関与や自己変革といった点から議論される（箕曲他 2021）。フィールドワークを学問アイデンティティとしてきた人類学では、フィールドワークの在り方、捉え方、またフィールドワークを介した人・社会との向き合い方が常に議論されてきた。自己と他者の出会いを形成するフィールド（ワーク）と、そこで自他が共存する社会への気づきの経験こそ人類学教育であるという立場から、積極的にフィールド教育を展開する人類学者は少なくない。人類学者自身が常に試行錯誤しながら「フィールドの人びと」と共に培ってきた相互理解の経験の機会を提供することで、人類学的思考を伝えようとする。そうした学習者のなかから次世代の人類学者が育つこともあるが、たとえ人類学者にならなくとも、その経験と思考は現代社会を生き抜くうえで重要であると考えられている。筆者もそのような経験をし、またそのような教育の機会を提供しようとしている一人である。

本稿では、筆者が2020年2月に神戸女学院大学文学部英文学科の学生を対象に実施した「バングラデシュ・ファッション・フィールド・スタディ」（以下、BFFS）を事例に、フィールド教育の意義と可能性を考える。検討するポイントは3つある。まずバングラデシュという場の設定である。設定の理由は筆者自身が20年来バングラデシュで人類学研究をしてきたからに他ならないが、日本の高等教育において、バングラデシュという場をどのように提示し、また学生たちにどのような出会いを提示するかという問題である。これにも関連する2つ目の論点は、ファッションというテーマ設定である。現代のグローバル社会では各社会の機能的境界は曖昧で、自他はあらゆる面で繋がっている。これを比較的わかり易く提示できるテーマとして、今回のフィールド教育では衣料

品ファッションに焦点を当てた。そして3つ目の論点は、今回のBFFSで用いた映像制作という調査（記録）手法である。デジタル化と技術革新によって技術的には誰でも簡単に映像を撮って作品にできるようになった。これをフィールドワークの「交渉」「記述」「表現」の手法として用いることで、各プロセスを明確化し、今自分が見ている（記録している）対象を自覚することができる。そうした映像制作の効果と課題について議論する。

各論点について論じる際には、背景や企画者の意図、実施した内容、学生たちの取り組みを提示しながら議論を進める。なお学生たちによる成果は映像作品としてまとめられており、肖像権と著作権の処理をしたうえで学科公式YouTubeチャンネルで公開している。学生たちが何をどのように学んだかはその作品で表現されているため、本稿で筆者が説明することは極力控える。

## 2. 当該プログラムの実施概要

### 2.1. Field Study 科目の概要

議論に入る前に、対象とするフィールド教育の概要について述べておく。本科目（E271(1)(2) Field Study）は神戸女学院大学文学部英文学科グローバル・スタディーズコースの選択メジャー（専門）科目の1つに位置づけられており、2年生以上が履修できる。半期（2単位）科目として前期または後期の開講となっているが、海外渡航による実地学習（移動時間を除く40時間以上の活動）は授業期間外の実施とせざるを得ないため、夏季休暇期間（8-9月）に実地学習を実施する場合は事前学習（12時間以上）を前期に行い、後期に成果発表を実施したうえで、後期履修科目として単位が認定される。春季休暇期間（2-3月）に実地学習をする場合には学年を跨いで翌年度前期の単位認定となるため、1年次終わりの参加が可能であるが、逆に卒業前の4年生は参加できない。

開講と内容の決定は、学科専任教員のなかから担当を希望する者に委ねられており、当該科目設置以来、フィリピン、ポーランド、米国（ニューヨーク）とフランス（パリ）、オーストラリアなどで実施されてきた。海外での実地学習には最低2名の担当者が引率することが規定とされている。この規定には、

渡航中に万一病人が出た場合のリスク対応が理由にある。

当該科目の目的は、以下のように説明されている（英語からの筆者訳）。

フィールド・スタディは、特定の課題に関する学生の理解を深め、学生の主体的な学びを促進し、さらに教室外での実地学習を通じた調査技術の習得を促すことを目的とする。具体的には以下を目指す。

1. 計画、観察、分析のスキルの向上
2. チームワークとリーダーシップの育成
3. 問題解決能力の開発
4. 積極性の養成

この目的設定からは、冒頭で述べた多義にわたる「フィールド教育」のうち、調査手法の習得、課題解決型学習（PBL）、あるいは箕曲ら（2021：3）が提唱している「自己変容型フィールド教育（Self-transformation-oriented Field Learning：SFL）」のいずれの側面からのアプローチも許されていることが分かる。逆にいえば、学科としてのフィールド教育の位置づけは固定されておらず、その都度担当者が行き先やテーマに応じて決定することができる。

## 2.2. Bangladesh Fashion Field Study の概要

上記科目設定のもとで、筆者は2019年度後期に事前学習を開始し、2020年2月から3月に実地学習、2020年度前期に成果発表および単位認定の流れで当該科目を担当した。同学科同コースで経済学・国際ビジネス論を担当しているMarcelo Fukushima 准教授が共同担当者として担った。Fukushima 准教授は国際ビジネスの観点からグローバル・ファッション・ビジネスを授業でトピックの1つとして教えていることから、人類学、地域研究に加えて、経済学の知見からもファッションについての課題解決型学習を促しうることが期待された。

実施計画にあたって担当者らが提示した目的は、以下である。

1. ファッションを通じたバングラデシュと日本の関係から「21世紀型南北問題」について具体的に学び、私たちの立ち位置やグローバル社会における役割について考える。

2. 現地を訪問して見学や聞き取り調査を実施するだけでなく、映像での撮影を通じて自らの視点に自覚的になり、学んだこと、考えたことを表現発信する。
3. いわゆる「発展途上国」での生活を経験することで、日本での生活の利点と問題点に客観的になる。

このように、本プログラムにおいてもやはり、課題解決型学習、調査手法（映像制作）の習得、そして自己への気づきを促す側面が混在している。この複合的経験こそが、現代の複雑なグローバル社会との対応において重要である。

実施に際して説明会を開催したところ、50名の出席者がいたが、実際に参加したのは2年次学生5名と1年次学生3名の計8名であった。説明会に参加して興味をもったが参加を断念した学生たちからは、保護者からの反対にあったという残念な声も少なからず聞かれた。

現地での受け入れ体制についても説明しておきたい。後述するが、バングラデシュではとくに1990年代以降、日本のNGO団体や大学などが企画をして参加者を募り、バングラデシュ現地NGOが実践している貧困対策や社会開発の取り組みを視察したり、一部関わったりする「オルタナティブツアー」が盛んに行われてきた。現地の旅行会社はあまり発達していないが、フィールド教育を実施する大学にとっては、そうした現地NGOが信頼できる受け入れ先となることが多い。現地NGOにとっては自分たちの活動を知ってもらうきっかけとなり、ひいては支援者の確保にも繋がる。

筆者は現地NGOの伝手ももっていたが、今回のBFFSではあえて現地NGOを受け入れ先とはせず（一部宿泊施設は利用させてもらったが）、調査研究でお世話になってきた個人的な友人たちに頼ることにした。宿泊先との連絡や移動手段などのコーディネートは、日本からやってくる調査者との交流歴の深いR氏に依頼し、現地空港到着から帰国便出発まで同行してもらった。参加者8名、引率教員2名とR氏の計11名だったため、マイクロバス1台で集団移動した。宿泊先は、首都ダッカでは海外（アメリカ）からのキリスト教宣教師のために建てられたゲストハウス（キリスト教関係団体であれば宿泊が可

能)、地方タンガイル県では現地 NGO が経営しているゲストハウスとした。どちらも一般個人客を受け入れておらず、そのことがリスク管理上、より安全と判断した。

安全確保の面で特筆しておくべきことは、バングラデシュでは2016年7月にダッカでテロ事件<sup>1</sup>が発生して以来、日本政府外務省が出す海外渡航危険情報レベルが3か2に上げられたままの状態が、2019年10月まで続いていた。それまでオルタナティブツアーを実施していた大学や国際協力 NGO も、ここ数年バングラデシュへのツアー実施を控えていた。本学の海外渡航行動基準でも危険情報レベルが2以上のところへの学生の引率は控えられていたが、2019年10月にバングラデシュ地方部の危険情報レベルが1に下げられたことによって、本プログラムが実施可能となった。首都ダッカに対してはレベル2が維持されていたが、主な活動地域が地方であったので実施が可能となった。また現地では、テロ事件以来、海外からの訪問者の安全確保がバングラデシュ政府にとっての重要課題となっていたため、団体訪問者が首都ダッカの外で滞在活動する際には、安全確保のために当該郡警察が警備につくことになっていた。今回のツアーにも地方での活動中は終始現地警察が数名で警備についてくれた。

また、各活動（見学対象）においてはそれぞれに関係する現地協力者（現地大学教員や筆者の知人）に助けもらった<sup>2</sup>。プログラムの企画にあたって、筆者は2019年8月に別件でバングラデシュを訪れた際に JICA ダッカオフィスと在バングラデシュ日本大使館を訪ねて、日本からの団体訪問の可能性について、主にリスク管理について相談した。さらに2020年1月にも単身で訪問し、ツアーの各訪問予定先の下見と現地協力者との打ち合わせを行った。

### 3. バングラデシュという「フィールド」といかに向き合うか

#### 3.1. オルタナティブツアーが主流のバングラデシュ

1971年の独立当初からバングラデシュでは、国際機関からの多額の支援を受け入れ、貧困対策や社会開発におけるさまざまな取り組みが繰り返されてきた。ことに独立以降、市民のなかから立ち上がった国内 NGO が、海外 NGO



との連携によって目覚ましい成長を遂げてきた。「小さな国家のもとでの市民社会」を重んじる新自由主義傾向の強い国際社会からの援助は、政府を介さず NGO との直接的な連携を好む<sup>3</sup>。また支援する側の国際社会においても、加速するグローバル化のもと南北格差問題や環境問題がより深刻化するなかで、「宇宙船地球号」的思考が、とくに開発教育の現場で重要視されるようになる。1980年代に日本が政府開発援助（ODA）支出大国になると、日本でも市民による国際協力活動が活発となり、国際協力 NGO が徐々に増えていく<sup>4</sup>。バングラデシュは、このバングラデシュ国内 NGO による貧困対策や社会開発活動と、国際協力を実施する海外からの NGO の、絶好の出会いの場となった<sup>5</sup>。

バングラデシュへの支援活動を行う NGO が行うツアー（スタディーツアー）は主に、現地 NGO の職員が受け入れを担い、参加者は活動現場を訪れて、活動の受益者や当該地域の人びとと交流するものが多い。あるいは海外からの国際協力 NGO を介さず、比較的規模の大きなバングラデシュ国内 NGO<sup>6</sup> が独自に受け入れプログラム（「NGO インターンシップ」などと呼ばれる）を提供している場合もある。このような国内外 NGO が企画するツアーの参加者が経験する「バングラデシュ」は、貧困対策や社会開発といった取り組みに集約される。ツアーの途中で博物館や遺跡群などいわゆる観光スポットを訪ねることもあるが、それがツアーの中心ではない。そして、バングラデシュでは一般的な観光よりもこうした「オルタナティブツアー」の方が圧倒的に多い。

このように、バングラデシュは社会経済的な状況から「明らかな発展途上国」とイメージづけられるだけでなく、ツーリズムの中心が「貧困」や「開発」とされる特殊な国際関係のなかで、常に、現実と反して、「アジアの最貧国」とのイメージが付されている。バングラデシュ国内 NGO にとっても、教育や保健衛生といった人びとの生活基盤に関わる活動を担っているにもかかわらず公的資金によって保障されているわけではないため、国際社会に対して「貧しいバングラデシュ」を主張し、支援を受け続けざるをえない側面がある<sup>7</sup>。

そうしたなかで、大橋（2017: 22-23）のような、国際協力 NGO 職員としてのバングラデシュでの実践経験をもって大学教育に従事する教員が、バングラ

デシュに学生を引率してフィールド教育を展開するとき、あるジレンマを感じる。大橋いわく、開発実践を担う国際協力 NGO 専門家が現地へ赴いて最初に必要なことは、現地の社会文化に対する理解と敬愛をもつことである。それを導いてくれる現地の人びとは専門家にとっての「先生」である。ところがバングラデシュに学生を送り出す諸大学では、バングラデシュでのツアーを「サービス・ラーニング」や「学生の自己肯定感を高めるプログラム」と位置づけることが多い。これに対して大橋は、「問題を抱える外国の訪問先を、日本人の奉仕によって解決に導くとする発想法がいやだった」と述べ、むしろ短期間の海外体験学習にできるのは「異文化理解」であるとしている（大橋 2017:22）。

今回の BFFS で筆者が目指したのは、貧困や社会開発といった「従来のバングラデシュの問題」に集約されないツアーである。テーマとして挙げたファッションは、バングラデシュの人びとの文化と社会変動を示すものであり、また私たちの生活の一部でもある。バングラデシュ＝発展途上国という強いイメージをもった学生たちに、バングラデシュのファッションに関心を持ち、また私たちとの繋がりからそれらを考えてもらうことを試みた。

### 3.2. 参加者の動機と事前学習

参加申込にあたっては、各自参加の動機を申込書に書いてもらい、さらに担当者 2 人で各参加希望者に対して 1 人 10 分程度の面接を実施した。参加の動機には、バングラデシュの、アジアの一国、発展途上国、イスラーム社会としての側面が述べられていたほか、バングラデシュの人びととのコミュニケーションの機会を期待する者もいた。今回のテーマであったファッションに関心をもつ学生も多く、ラナプラザ事故をきっかけに知ったバングラデシュのファストファッション生産国としての側面や、バングラデシュから世界に通じるファッションブランドの展開を試みる「マザーハウス」をきっかけに興味をもつ者もいた。映像制作を参加希望理由に挙げていた学生もいた。

8 人の参加者のうち 1 人は今回が初めての海外渡航であったが、2 年生の中には、1 年次夏季休暇中に短期語学留学に参加していた者も数名いた。また多

くの学生が高校の修学旅行などで海外を訪れた経験を持ち、フィリピンなど東南アジア諸国への渡航経験があった者もいる。また新型コロナウイルス感染症拡大以前の社会では、LCCの普及もあり、大学生でもアルバイトで資金を貯めて海外旅行ができる状況にあったため、北米やヨーロッパ諸国への友人との海外旅行を経験していた者もいた。そうした学生たちが本プログラムへの参加動機の1つに挙げていたのは、「大学からのプログラムでなければバン格拉デシュに行くことはできないと思う」ということであった。たしかにバン格拉デシュは海外からの観光客受け入れ体制の整備が進んでおらず、上記に述べたようにツアーの主流が国際協力NGOや大学が実施するオルタナティブツアーであるため、バン格拉デシュに行きたければそうしたツアーに参加するのがもっとも容易である。

本プログラム参加者に限らず、学生たちから聞かれる発展途上国訪問のハイライトは、どうしても物乞いをする人びとなど貧困の側面に集約されがちになる。そこには、メディア情報によって無意識に内在化されたイメージを現場訪問で「確認する」に留まってしまう問題が見受けられる。とくに発展途上国とされる地域への訪問にあたっては「貧困確認ツアー」にならないように、現地での「意外な発見」を自覚できる柔軟性をいかに導きうるかが問われる。

事前学習は主に、授業のない土曜日と後期授業期間終了後から実地学習出発前の間に実施した。バン格拉デシュに関しては、国の概要（歴史、政治、経済、風土気候）や現地ベンガル語の挨拶などについて講義した。また授業の空き時間に、バン格拉デシュに関する映像資料を皆で視聴する機会も二度もった。さらに、一般書を中心に参考文献を挙げ、各自が読むよう図書館に配置した。

### 3.3. 参加学生のバン格拉デシュ社会・文化・人びととの交流

現地訪問の行程は表1に示す。訪問先の中心は後述するファッションの諸現場であるが、各訪問先での人びととの出会い、現地協力者との交流、現地での滞在や食事を通じた異文化経験を参加者たちはどのように感じていたのだろうか。現地で出会う人びとの大半はベンガル語話者のため、学生たちが何か詳し

表1 「Bangladesh・Fashion・Field・Study」現地行程表

1日目	朝	出発
	夜	現地到着
2日目	朝	ダッカ見学：国立博物館、市場、ブックフェア
	昼	Aarong, Grameen-UNIQLO 訪問
	夜	Hasan Ashraf 氏との懇談、振り返り
3日目	朝	ダッカ→タンガイル県移動
	昼	タンガイル県 S 村タンガイルサリー生産地見学、サリー定期市
	夜	振り返り
4日目	朝	タンガイルサリー生産地撮影
	昼	Sonal Bangla Children's Home 訪問 <sup>8</sup>
	夜	振り返り
5日目	朝	タンガイル県→ジャマルプール県移動 N 村でノクシカタ刺繍をする女性たちとの交流、撮影
	昼	ノクシカタショールームでの聞き取り、撮影
	夜	ジャマルプール県→タンガイル県移動、振り返り
6日目	朝	タンガイル県→ダッカ移動
	昼	アパレル工場労働者との交流
	夜	振り返り
7日目	朝	グリーンファクトリー訪問
	昼	
	夜	現地結婚式出席見学
8日目	朝	発表準備
	昼	dRi（開発研究所）でのシェアリング
	夜	各自学んだことを現地研究所員の前で発表 Hasan Ashraf 氏（Jahangirnagar 大学人類学部准教授）の講演
9日目	朝	自由時間
	昼	ダッカ在住日本人の方との交流
	夜	現地出発
10日目	朝	帰国

く尋ねたいことがあるときは筆者の通訳を介するか、英語の通じる現地協力者に聞くことになる。直接的な言語コミュニケーションの面では限界があったが、それでも学生たちは身振り手振りでのコミュニケーションや写真撮影などで、とくにツアー中終始行動をともにしていたコーディネーターや運転手、さらには警備についていた警察官などとの交流を楽しんでいたようである。

食に関する学生たちの反応には興味深いものがあった。事前学習のなかでバングラデシュの「カレー」（おかず）について説明し、参考文献の『おいしいバングラデシュ』についても紹介した。また皆で近隣のインド料理レストランに食べに行って「バングラデシュの食事はこれよりもマイルドだ」と話していた。ところが学生たちは渡航に際してスーツケースのなかにたくさんの非常食や菓子類を持参していた。しかし10日間の滞在中、日本から持ってきた非常食はほとんど食べず、現地の食事を十分に楽しんでた。筆者が「バングラデシュの食事は美味しいから大丈夫と事前に言っていたのになぜそんなにたくさんの非常食を持参したのか」と尋ねると、「現地の食事がもし食べられなかったら困ると思った。先生はバングラデシュに慣れているから美味しいと感じても、私たちは初めてなので信じられなかった」とのことである。学生たちのバングラデシュの食に対する反応は「意外に美味しい」であった。手で食べる習慣も初めは難しそうであったが、日を追うごとに慣れていった。ツアー後半では学生たちのほうから食べたいものをリクエストすることもあった。ドイと呼ばれる現地の甘いヨーグルトがとても人気であった。

## 4. 「ファッション」というグローバル・イシュー

### 4.1. 「貧困」から「ラナプラザ」へ

本プログラムのテーマをファッションにした理由には、1つには本学で実施する初めてのバングラデシュフィールドスタディとなるため、学生にとって興味を持ちやすいテーマにするのがよいと思われたことがある。

また、21世紀に入って、社会開発から経済発展へと課題がシフトするバングラデシュにとって、グローバル社会との主な関係も、開発援助から貿易へと変化している。2000年以降バングラデシュは常に年間6%以上の経済成長率を維持しているが、とくにそれを支えているのが国内での輸出型アパレル生産業と海外出稼ぎ移住労働である。植民地経験の尾を引いて形成されてきた世界の南北格差問題は、現在のグローバルビジネス下ではより具体的に私たちの生活と直結している。大量生産大量消費型の衣料品生産業は、この「21世紀型南北問

題」の典型例といえる。私たちが日々着用している衣料品の多くが多国籍企業によって、労働賃金の安い地で生産され安価な値段で大量消費される。多国籍企業は南北（先進国・発展途上国）の経済格差を利用するかたちで、バングラデシュのような生産労働コストの安い発展途上国に生産現場を移していく。

バングラデシュは現在、中国に次ぐ世界第2位の輸出型アパレル生産国である。1970年代終わりにはすでに首都ダッカで輸出向け既製衣料品を生産する工場が誕生し、その後韓国企業からの技術支援もあって急速に成長していった。1980年代半ばまではジュート生産が輸出の中心を占めていたが、ジュートが人工ポリエステルに追いやられるにつれ、代わりに既製衣料品が輸出生産物の中心を占めるようになった。とくに21世紀に入って以来、都市部近郊を中心に縫製工場やニット生産工場が急増した。アパレル生産輸出を担う企業が加盟するBGMEA（Bangladesh Garment Manufacturers and Exporters Association）には現在4,500社が加盟しており、その下請け工場を合わせると約7,000の工場があるといわれている。そうした工場で働く労働者の大半は農村出身の貧困層で、その6割から7割が女性である。彼女たちがもらう賃金が当該社会での生活を十分に保障しているかということ、決してそうでもない。

これだけ世界のアパレル生産を担いながらも、バングラデシュの人びと、とくに女性たちが身に纏っているのはサリーやサルワルカミーズと呼ばれる民族衣装で、自分たちが工場で作っている製品はほぼすべてが輸出用である。

そうしたなか2013年4月にダッカ郊外で「ラナプラザ崩壊事故」が起こった。建物の構造基準を超える数のアパレル生産工場が軒を並べた雑居ビル（ラナプラザ）が崩壊し、そこで働いていた1,127人が建物の下敷きで犠牲となり、さらに2,500人以上の負傷者を出したアパレル業界史上最悪の事故である。そこで生産されていた製品の大半が輸出向けで、私たちが消費しているブランド商品であったことが、世界に衝撃を与えた。これを機にバングラデシュのアパレル生産工場の劣悪な労働環境や労働状況が問題視された。今回のBFBSへの学生たちの参加動機にも出てくるほどラナプラザ崩壊事故は有名となったが、そのことは、バングラデシュのイメージが「貧困」から「ラナプラザ」という、

どちらもネガティブな問題に集約されたままであることを物語っている。ただ、「ラナプラザ」はバングラデシュの問題ではなく私たちの問題である。

この「ラナプラザ」イメージに色付けられたバングラデシュファッション(問題)に対して筆者が提供したかったフィールド教育は、このイメージを再考し、バングラデシュと日本の繋がりと関係を考える機会であった。その方法は3つあり、1つは輸出型アパレル産業とは異なる現地のファッション文化を通して、もう1つは輸出型アパレル生産工場で働く労働者たちとの交流を通して、残る1つは2013年以降のアパレル生産業の変化を通して、である。

#### 4.2. 事前学習(身の回りのバングラデシュ製品)

事前学習ではまず、私たちの身の回りにある「バングラデシュ製」の商品に目をやることで、それらを身近に知覚する機会を促した。バングラデシュ製の、どのような商品がどのような店で販売されているか、それぞれに探して商品タグの写真を撮ってきて共有した。また参加者の動機にあった「マザーハウス」の大阪支店を皆で訪ね、支店長の山崎氏からマザーハウスの企業理念や戦略、またバングラデシュの生産工場の様子などをレクチャーしてもらった。消費者の立場から見た、ファストファッションの店で販売されているバングラデシュ製商品とマザーハウスのバングラデシュ製商品の大きな違いは、それらの商品がバングラデシュ製であることをどれだけ主張しているかである。ファストファッションの店では同じ商品の同じサイズの列のなかに「バングラデシュ製」と「ベトナム製」などが混在していて、それを買う人は生産国を意識せず手に取る。それに対してマザーハウスでは、鞆などのバングラデシュ製商品がどのようなところでどのような人びとによって生産されているかが分かるように並べられている。もちろん商品の値段の差もあり、気軽に買えることが売りのファストファッションと、学生の経済状況では簡単には買えないマザーハウスのブランド商品では、購入の際の吟味の度合いも異なる。その違いこそが自らの消費行動を再考する機会となる。

また2013年のラナプラザ崩壊事故をきっかけに問題視されるようになったア

パレル産業の裏側を描いたアメリカのドキュメンタリー映画『ザ・トゥルー・コスト—ファストファッション真の代償—』（2015年）を視聴し、それぞれ気づいたことを議論した。今回の現地協力者の1人でもあり、バングラデシュの縫製工場で働く労働者について人類学的に研究している Ashraf 氏の論文（Ashraf 2017）の熟読を、事前学習課題として提示していた。さらに、共同担当者の Fukushima 准教授からは、世界の既製衣料品生産の歴史やバングラデシュの経済状況についての講義をしてもらい、より大きな文脈からバングラデシュの現状を捉えることを促した。

### 4.3. グローバルアパレル生産とローカルファッション

表1にあるように、実地学習では現地の衣料品にまつわる場を可能な限り訪問した。まず首都ダッカでは、バングラデシュの人びとが利用する市場（ニューマーケット）や、海外からの訪問客や国内富裕層を対象とした現地衣料品や生活用品、民芸品が並ぶブランド店（Aarong アーロン）、日本の代表的なファストファッション企業（ユニクロ）とバングラデシュのソーシャルビジネスを提唱する企業（Grameen Bank）が連携して展開する Grameen UNIQLO の店舗などを訪れた。バングラデシュに到着したばかりの時点でのこれらの店への訪問では、そこで売られている商品の意味や価値を考えるには至れなかったが、映像撮影を試みることで、後でその位置づけを確認することができたと思われる。

#### 4.3.1. タンガイルサリー生産現場

ダッカで2日間滞在した後、車で北に約4時間の距離にあるタンガイル県に移動した。タンガイル県は古くからサリーの生産が盛んで、そこで作られる「タンガイルサリー」はバングラデシュ全土に流通している。タンガイルサリーは綿織物で普段着用で使用されることが多いが、最近ではとくに若い世代がサリーを日常的に着なくなったこともあり、安価な普段着用サリーの需要が減少し、比較的高価な外出用サリーの生産へと変化しつつある。また近年、電動織機が導入されて、手織りから機械織りへの移行も見られている。機械織り



は織目が細かく揃っていて、また複雑なパターン模様も可能になり、高級なサリーの生産には向いているという。訪問したタンガイル県 S 村はタンガイルサリーの有名な生産地の一つで、S 村に近づくともガシャン、ガシャンと機織りの音が聞こえてくる。S 村では糸紡ぎから染色、パターンの作成から機織りまでの過程がそれぞれの工場で行われていて、糸紡ぎは主に女性たちが担い、機織りは男性が担う。女性はほとんどが S 村とその近隣出身の女性たちであったが、機織りをする男性たちは他県からの出稼ぎ者も多かった。

タンガイル県では現地 NGO が運営しているゲストハウスに滞在し、JICA プロジェクトや日本人研究者の調査に長年関わってきた A 氏に S 村への案内や訪問調整についてコーディネートをお願いした。

まず到着した日に S 村に行き、村の様子や各工場での機織りの様子を見学した。インタビューをしたり映像撮影をしたりするのは翌日とし、1 日目は S 村内を歩きながら全体を見学することを試みた。ちょうどその日はタンガイルの街中でサリーの定期市があるということで、市場の見学にも行った。全国から卸売業者が買い付けにくるところで束売りされていたが、特別に 1 枚ずつ売ってもらい、学生たちは自分が着るサリーを選んで購入した。

現地滞在中は毎晩その日に経験したことや考えたことを振り返る時間を共有した。タンガイル県に到着した日は首都ダッカとの雰囲気の違いやサリー工場を見た感想などを共有するとともに、翌日の撮影に備えた話し合いを行った。撮影の詳細については後述するが、1 日目の訪問で印象に残ったこと、聞いてみたいと思ったことをそれぞれが出し合って、撮影の際にさらに詳しく観察し、インタビューを行うことにした。学生たちはサリーそのものよりもそこで機織りをする職人たちに、より関心を持っていた。

興味深かったのは、職人たちが手織りより機械織りの方に価値をおいていたことである。サリーに対して工芸品のイメージを強く持っていた学生たちは、手仕事（技術）の方が機械より特別性において優ると考えていたが、完成品の織目の美しさや、手織りは自分のペースでできるが機械は電動の速さに合わせなければならないため操作が難しいなどの点において、機械織りの方が技術が

必要で、商品価値も高いという。

#### 4.3.2. ノクシカタ（刺繍布）生産および販売現場

タンガイル県滞在の3日目は、タンガイル県からさらに北に約2時間行ったところにあるジャマルプール県を訪問した。ジャマルプール県には筆者が20年来フィールドワークをしている場所とネットワークがある。

バングラデシュの女性たちは古くから、着古したサリーなどを重ね合わせて針子刺繍を施して敷布やおくるみなどに再利用する「ノクシカタ」という刺繍布の文化をもっている。1980年ごろからは国内 NGO がこの女性たちの刺繍の技術に目をつけて、古着ではなく新しい布に決められたデザインを刺繍して商品化するというビジネスが始まった。都市近郊や農村の女性たちはこれを家内職としていたり、NGO が用意した作業場に集まって大きなベッドカバーのような刺繍制作をして、僅かながらも自ら収入を得た。当初は海外からの訪問者の土産やフェアトレード商品として国際協力 NGO などが購入する傾向が強かったが、現在では海外向け商品より国内富裕層向け商品の方が多くなっている。刺繍入りのサリーや、バングラデシュの女性たちが日常的に着ているサルワルカミーズへの刺繍などが増えている。初日にダッカで訪れたアーロンがその代表的な店で、それを経営しているのは国内最大 NGO の BRAC である。

ジャマルプール県は、BRAC がノクシカタ商品生産を開始した当初からの生産地である。バングラデシュ全土でノクシカタの文化は見られるが、地域によって刺繍の特徴が若干異なる。またノクシカタが盛んな地域とそうでない地域の差もあるようである。ジャマルプール県はノクシカタ作りが盛んで、また他県に比べて保守的で女性たちが家に籠っている割合が多かった。そうした女性たちの内職として、商品化されたノクシカタ生産の拠点となった。

BFFS で訪れたのは、ジャマルプール県 N 村と、同県市街のノクシカタ等刺繍製品のショールームである。N 村は筆者の調査地の近くで、多くの女性たちが家事や農作業の合間に刺繍をしていた。訪問時には、刺繍をしている村の女性たちが集まってくれて、話をしたり、刺繍を見せてくれたり、また各家の中を案内したりしてくれた。女性たちが刺繍していたのは、前述のように現

地の女性たちが着るサルワルカミーズであった。N村には刺繍の受注を請け負って、他の女性たちに仕事を振り分ける女性がいる。一方、市街地のショールームで商品を売っているのも女性で、そうした女性が各村にコンタクトパーソンを抱えている。ショールームには全国から買い付け業者がやってきて、こうした業者は各都市の小売店に卸すか、都市部の女性たちに卸す。都市部の女性たちは市場の一角や自宅で小さなマーケットを開いて近隣の女性たちに売る。興味深いのは、これら一連の生産から販売までのビジネスの中心を女性たちが担っているということである。

### 4.3.3. 輸出型アパレル生産

上記のローカルファッション生産について視察したうえで、輸出型アパレル生産の現場を訪れた。アパレル生産工場は一般的に、買い付け業者以外の外国人の訪問を固く禁じているため工場のなかを見学するのは難しかったのだが、アパレル生産の現場で働く筆者の若い友人たちとの交流と、またラナプラザ崩壊事故以降にバングラデシュに台頭している「グリーンファクトリー」の工場を見学することができた。

まず、筆者は自らの研究として、1990年代生まれの世代が農村に普及した学校に通うようになったことで、当該社会をどのように変化させていくのかを当事者の立場から追ってきた。農村で教育を受けることによって親世代が従事してきた農業とは異なる道を目指すようになった若者たちにとって、現在ほぼ唯一ともいえる職の機会がアパレル生産業である。このアパレル生産工場で働く若者たち（小学生の頃から筆者の調査に協力してきた友人たち）との出会いを学生たちに提供した。バングラデシュの休日である金曜日にダッカ郊外にある独立記念公園で待ち合わせをした。筆者の友人S氏（男性）は後期中等教育（12年生）を卒業してからダッカに出てきて縫製工場で働いて約8年になる。最初は縫製工場で働くことに葛藤を覚えていたが、仕事を覚えるにつれて自信が付き、自らのネットワークで条件のよい工場に2度転職した経験がある。訪問当時、一緒に働いていた2人の同僚とともに会いに来てくれた。学生たちが筆者の通訳を介して彼らに労働環境について尋ねたところ、ラナプラザ

崩壊事故以降コンプライアンスの強化により、残業時間が減ったり、給与の改善も少しは見られるようになったという。

次に、前述の Ashraf 氏の紹介により、近年増えつつあるグリーンファクトリーの見学も可能となった。グリーンファクトリーとは環境と安全に配慮した工場で、LEED (Leadership in Energy and Environmental Design) という認証システムがある。LEED 認証を取得している工場は2021年現在バングラデシュに135社あり、世界で最も多い (Kiron 2021)。今回訪れることが許された工場も LEED 認証を取得しており、広大な敷地に占める建物面積は半分以下、労働者のための食堂や保健室、託児所が完備されていたり、ソーラーパネルや浄水装置も備えられていた。こうした工場では機械化が進んでいる。機械を入れることで労働者数を削減し、それまで2人で担っていた工程も担当者を1人にする。つまり労働環境の改善が見られる一方で、改善によって失業した労働者も少なくないという現実がある。ラナプラザ以降の失業問題については、縫製工場で働く女性たちを描いたバングラデシュ映画『メイド・イン・バングラデシュ』の实在のモデルの D 氏がダッカでの滞在先を訪ねてくれた際にも聞かれた。

このように、今回の BFFS では、現地のファッションと輸出型アパレル生産という、バングラデシュで展開されている「ファッションビジネス」をローカルとグローバルが入り混じる面から提示した。学生たちは、このファッションの両面をどのように理解するかが問われた。

## 5. 映像撮影記録

### 5.1. ツールとしての映像制作

フィールド教育での経験や学びを記述して成果としてまとめる過程は、その経験を積む過程と同じくらい重要である。あるいは記述してまとめる過程こそが経験を知覚して意味づける行為であるといえる。フィールド教育の調査手法としての意義を考えれば、人類学者がフィールドノートをつけ、そのフィールドノートの記述をいかに体系化し、そして論文にするかというプロセスを学生

たちにいかに経験させるか、ということになる。

筆者は自らの研究手法の1つとして映像制作を用いている。映像制作では対象についてまず知って、その知った内容に基づいて作品を企画し、撮影し、編集する過程がある。各過程において、自分が対象をどのように捉えるか、どのような立場から向き合うかが問われる。そして、自分が理解した内容を映像作品として、対象となってくれた当事者に提示しうる。筆者はこの一連の過程に、フィールド教育の過程の可視化（意識化）の可能性があると考え、これまでも大学教育において、「映像制作を介した異文化理解教育」を実践してきた（南出 2018）。今回の BFFS でも調査の手法に映像制作を用いた。前述のように、参加者のなかにはこの手法に興味をもって参加した者もいた。

映像制作を手法とすることの可能性には以下のような点が考えられる。まず、単にメモとして撮影するのではなく、最終的には撮った映像を作品としてまとめること、公開することを念頭におくことで、構造的理解を促すことができる。また、そこで出会う対象に関する理解を、言葉と画像を組み合わせる表現する必要があることから、説明と立証が常に一体となり、対象に忠実になれる。これは3節で述べた、例えば発展途上国に対してもっている先入観を当てはめて確認するだけで終わってしまうことを避けられる可能性にも繋がる。また、観察のみと撮影では、対象に対するアプローチが異なる。撮影にはカメラを向けることの許可が必要だけでなく、相手にカメラを向けることは相手に撮影（カメラ）を意識させ、ときに緊張させる。撮影する方も同時に、撮影している間は非日常の瞬間に入り、緊張状態になる。こうして撮影する者とされる者の間にある種の一体感が生じ、そのことが言葉を越えたコミュニケーションとなる。編集する際に撮影映像を振り返ったとき、そこに新たな発見が得られることも、映像制作の利点である。

一方、課題もある。本来なら映像制作においては、対象について事前に調査を行ってから企画し、それから撮影するのだが、短期間の渡航で、初めて行く海外の地での制作となると、対象についての調査と撮影を同時に進行させなければならない。また、フィールド教育のなかで経験することはすべてがメイン

であり、交流することと調査することは切り離せるものではないのだが、映像はその一部を切り取った記録となるため、撮影という行為によって全体の学びのなかに強弱を付けることとなってしまう可能性がある。これを回避するためには過度に映像作品制作を目的化しないこと、映像はあくまでプロセスを踏まえるための手段であるというスタンスを明確にすることが重要であろう。

## 5.2. 事前学習（撮影技術）

デジタル化以降、映像機材の進化は著しく、機材の操作は格段に簡単となり、見かけ上は「誰でも撮れる」ようになった。さらに現在ではスマートフォンでも高画質の動画撮影が可能となり、学生たちは毎日の生活のなかで「撮影機材を持ち歩いている」。しかし今回のBFFSでの撮影にはスマートフォンではなくデジタルビデオカメラで撮影することを義務付けた。もちろん個人のメモとしてスマートフォンで写真や動画撮影をすることは構わないが、作品に用いる映像は基本的にデジタルカメラで撮影する。対象にカメラを向けることに自覚的になり、撮影段階から作品にすることを意識するためである。

事前学習の半日をかけて、基本的なデジタルカメラの操作方法や、編集して作品にすることを意識した「見せる映像」を撮影するための技術について掻い摘んで説明した<sup>9</sup>。参加学生たちには渡航までの間にもカメラを持ち帰って撮影練習を促した。

## 5.3. 撮影

前述のように、通常であれば撮影の前に調査をし、調査のなかから対象のどのような側面に焦点を当てるかを定める企画段階に十分な時間を掛けるべきなのだが、今回の場合は現地滞在中に対象について知る過程と撮影する過程をほぼ同時に進めなければならない。そこで、8人を2つのグループに分け、各グループのなかでメモを取る者と撮影する者を分担した。そうすることで、撮影した映像をあとで見返した際に、各場面の意味の再検討が可能になる。

また、前述のように、フィールド教育は対象について理解すると同時に自己

変容の機会でもあるため、撮影の対象は、バングラデシュの人びとや社会であると同時に自分たち自身でもあるとした。そもそも「相手にどのようにカメラを向けているか」ということに撮影者の自覚が促されるのだが、今回はより積極的に自分たちを撮影の対象に含めることを促した。ただ、「自分たちの記録」に集約されすぎないように、各グループに2台のカメラ（撮影者）を配置し、1台はバングラデシュで見ている対象の記録、もう1台は自分たちの記録をするように、一応の役割分担をした。担当はその時々でグループ内で交代した。

#### 5.4. 編集

撮影した映像を全体で1本の作品に編集したのだが、この作業を行った2020年度前期は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため学生たちは大学に通学できず、編集作業もすべてオンラインで連携作業することになった。

まずは持ち帰った撮影映像を「カット表」にすべてリストアップする作業を、分担しながら行った。その後、書き出したカット表上の情報を全体でグルーピングし、作品全体の構成を話し合った。2グループ計4台のカメラで撮影された映像は、4つのテーマに分けられた。ツアー全体の記録（主に自分たちを撮ったカメラによる）、タンガイル県でのサリー生産現場、ジャマルプール県のノクシカタ生産・販売、そして縫製工場で働く若者たちとの交流やグリーンファクトリー見学など輸出型アパレル生産業である。映像データを Google Drive 上で編集担当者間で共有することにし、テーマごとに4つのフォルダに分けて配置した。4人の学生たちが映像編集作業を担当することになり、テーマ1つずつを分担した。あとの4人は編集された映像に入れる補足的な字幕やナレーションを考える（必要に応じてナレーションを録音する）こととした。本来なら編集を大学で行うために編集用のパソコンと編集ソフトを用意していたが、オンライン授業となったため大学で作業することができず、編集を担当する学生たちに自分のパソコンに編集ソフト（Davinci Resolve）を入れて使うように促した。話し合いや編集手順の提示は Zoom ミーティングで行った。

編集班の4人とは、各テーマ部分のラフ編集の確認、詳細編集の確認、4つ

の諸場面をどのように繋いで全体の流れを構成するか、について話し合うために、随時 Zoom ミーティングを開催した。次に、作品として完成させるためにどこにどのようなナレーションや字幕を要するかを、ナレーション班も合流して話し合った。話し合いに基づいて、ナレーション班が英語で字幕とナレーションを考えた。ナレーションの録音もナレーション班の者が担当した。字幕とナレーション班の助言指導は Fukushima 准教授が担当した。最終的に編集された映像を繋ぎ、決定された字幕と録音されたナレーションを入れる作業は筆者が行うこととし、学生たちに指定された通りに入れた。

## 5.5. 公開

完成した作品を公開するにあたって、映像に登場してくれた人びと、現地での協力者に肖像権の確認作業を行った。撮影に協力してくれた方々が全員メールやインターネットを利用しているわけではないので、現地協力者を介して映像を確認してもらったり、許可をもらったりした。4つのテーマのうち縫製工場（グリーンファクトリー）のところは公開の許可がとれなかった。現在、グリーンファクトリーも含めてバングラデシュの縫製工場は、政治性の高いセンシティブな課題であるため、いくら日本からの学生の視点とはいえ、映像が公開されることで政治的な意味を持ちうる可能性があり、関係者に危険さえ及ぼす可能性があるとの現地協力者からの警告があり、その部分の公開は断念せざるを得なかった。撮影時には記録のための撮影は許可されていたが、やはり公開となると難しい。編集を終えてからの確認となったため担当した学生には残念だったが、映像にはありがちなことで、これも学びの一部に位置づけられる。

その他の部分については問題なく、最後にクレジットを入れて学科 YouTube で公開することとした。編集の過程で学生たちはフィールドでの発見と学びをより丁寧に振り返ることができ、そして完成した記録映像を多くの人に見てもらいたいという気持ちになったようである。

作品の著作権は学科に帰属することとした。これは、もし8人の共同著作権とした場合、仮にこの映像を8人のうちの誰かがどこかで発表したいとなれば



他の7人全員に許可を取らなければならない。本作品の著作権の管理を学科にしておくことで、学科が判断して映像使用の許可をすることができる。映像作品は図1に示すQRコードからアクセスすることができる。

## 6. 総括（成果と課題）

以上、本稿では2020年に筆者が担当したバングラデシュ・ファッション・フィールド・スタディ（BFFS）を事例に、バングラデシュにおけるフィールド教育について検討した。とくにバングラデシュというフィールド、ファッションというテーマをどのように提示したかについて議論したうえで、手法として用いた映像制作の可能性について検討した。

国際社会からの支援を全面的に受け入れながら貧困や社会開発の課題に取り組んできたバングラデシュでは、これらの課題を市民レベルの国際協力活動にも開き、NGOの活動や大学におけるサービス・ラーニング実践の機会を提供してきた。バングラデシュ国内NGOは貧困対策、社会開発におけるさまざまなアプローチを展開しており、「活動に関わりながら学ぶ」ための豊富なテーマを提供しうる。またこれらの機会を通して、バングラデシュ国内NGOは海外からの訪問者受け入れにも長けている。しかし、NGO主導のツアーはバングラデシュと国際社会の関係を開発援助に集約させてしまう傾向があり、現在のバングラデシュの複雑な社会変動を十分に汲み取れない可能性がある。そこで今回はNGOに受け入れを依頼せず、筆者自身がバングラデシュで築いてきた複数のネットワークに頼ってツアーを構成した。

反省点としては、若干内容を詰め込み過ぎた感があり、初めてバングラデシュを訪れる学生たちには見たもの聞いたことを現地で十分に消化する時間がなかったこと、また人びととの交流時間が限られたことである。企画者がテーマを設定するより「場」のみを提供し、そこでじっくり自由にテーマを探させ



図1：公開映像アクセス用QRコード  
<https://youtu.be/mAL4O8bv-f8>

る方法も取れたかもしれない。ただその時に懸念されるのは、渡航前にバングラデシュにもっている先入観に惑わされないようにするということである。

映像制作を手法とすることで、学生たちに対象者とのコミュニケーションを促すとともに、自分が見ているものを自覚的に記録させうる。映像撮影が目的化しすぎると撮影外の経験が軽視されてしまう危うさがあるが、手法として用いる限りでは撮影から編集の過程の可視化や自覚において有効であった。

現地バングラデシュに渡航した2020年2月にはすでに新型コロナウイルス感染症が拡大しつつあり、とくに中国や日本での感染者が世界のニュースになっていた。すでに海外渡航に懸念が見え出していたなかでの実施には、大学も学生たちの保護者も、また現地協力者たちにも少なからず心配をかけた。そうしたなかでもプログラムを実施できたことは大変ありがたく、ひとえに各関係者の理解と協力のおかげである。また、帰国後には世界中の感染状況が悪化し、本来ならキャンパスで、現地での経験にわいわい盛り上がりながら成果発表の準備をしていたはずが、学生たちは大学に来ることができないなか各自宅でオンライン作業を強いられた。それぞれ努力し、連携して作品を仕上げられたことを評価したい。

コロナ後のフィールド教育がどのようなかたちで再開できるか未だ見通しがつかないが、オンラインの経験は、準備段階における事前教育を充実させるだろうし、そして現地に足を運んで直接人びとと関わることでしか得られないものがあることに改めて気づかせてくれるだろう。学生たちとともに再びフィールドに出かけられる日が待ち遠しい。

## 注

---

- 1 日本人を含む国内外の28人が犠牲となったイスラム過激派集団によるテロ事件。
- 2 現地協力者のサポート体制については対象ごとに説明する。
- 3 1990年代当時の世界銀行の報告などによれば、バングラデシュ政府の汚職問題も、国際社会が現地 NGO との直接的な連携を好む理由として挙げられていた (Lewis 2011: 21)。

- 4 たとえば1987年に、日本の NGO が会員となって組織されている NGO ネットワーク JANIC が設立された。
- 5 これにはバングラデシュの人びとの豊かなホスピタリティある国民性も大きく関与しているが、これについては別の機会に議論する。
- 6 BRAC (Bangladesh Rural Advancement Committee) や Grameen Bank など。
- 7 これを脱却するため多くのバングラデシュ国内 NGO がとる施策がマイクロクレジット（無担保小規模融資）である。マイクロクレジットの趣旨は、インフォーマルセクタービジネス起業融資を通じた貧困層の自立支援であるが、利用者が支払う利息が各 NGO を組織的に成長させるほどの資金源となる。実際に大規模 NGO はどこもマイクロクレジットを実施して、国際支援からの独立を果たしている。しかし、返済利息の厳しい取り立てが時に貧困層の人びとをさらに苦しめ、本来の趣旨にそぐわないとの批判もある。
- 8 タンガイル県にある売春宿で働いている女性たちの子どもの保護施設で、現地 NGO の SSS が運営しており、見学に行った。
- 9 映像制作を教えるにあたっては（南出・秋谷 2013）をテキストにしており、今回もその一部（5章）を抜粋して紹介した。

## 参考文献

- Ashraf, Hasan (2017) The Threads of Time in Bangladesh's Garment Industry: Coercion, Exploitation and Resistance in a Global Workplace. *Ethnoscripts* 19(2): 81-106.
- Kiron, Mazharul Islam (2021, April 11) List of LEED Certified Green Garment Factories in Bangladesh. Retrieved from Textile Learner website. <https://textilelearner.net/green-garment-factories-in-bangladesh/>
- Lewis, David (2011) *Bangladesh: Politics, Economy and Civil Society*. Cambridge University Press.
- Morgan, Andrew (Director) (2015) *The True Cost* [Motion Picture]. CA: Life Is My Movie Entertainment.
- 大橋正明 (2017) 「コラム：海外体験学習における多様性」子島進、藤原孝章編『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版：22-23頁。
- 子島進、藤原孝章 編 (2017) 『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版。
- 南出和余、秋谷直矩 (2013) 『フィールドワークと映像実践—研究のためのビデオ撮影入門』ハーベスト社。
- 南出和余 (2018) 「映像制作による対話的コミュニケーション—映像・人類学・教育」南出和余、木島由晶 編『メディアの内と外を読み解く—大学におけるメディア教育

実践』せりか書房：207-223頁。

箕曲在弘、二文字屋脩、小西公大 編（2021）『人類学者たちのフィールド教育—自己変容に向けた学びのデザイン』ナカニシヤ出版。